



三到図書館 ニュース

2010年11月発行
No.67

J. F. Oberlin University Library

◇ 巻頭メッセージ
◇ データベース紹介

◇ 三到図書館と私
◇ ガイダンス報告

◇ 三到図書館のあゆみ
◇ 読書運動プロジェクト

祈 り

桜美林学園理事長・桜美林大学学長 佐藤 東洋士

2011年5月に、桜美林学園は沿革を遡ると創立90周年を迎える。創立者清水安三先生は様々な困難と出会いながらも今日の学園の基礎を創られた。その中でも最大の困難は、日本の敗戦により、当時1万1千坪の校地、大小23の校舎をもつ北京のキャンパスが、新政府によって接収されたことであった。

25年にわたって、様々な方々からの支援を受けながら育ててきた学校が、政府の命令ひとつでなくなってしまったのであるから、心中察するに余るものがある。しかし、清水先生は嘆き悲しむばかりではなく、常に聖書に聴き、神に祈ることによって学園の再建を果たした。まさに奇跡的なことであって、清水先生夫妻の信じて疑わなかった全知全能の神が、彼の祈りを聴き留めたといえよう。この間のことは『希望を失わず』あるいは『石ころの生涯』、『桜美林物語』に本人が詳しく述べているので、是非一読して欲しい。

その後も、折々に清水先生は神に祈り、現在のメインキャンパスの中心となっている5千坪の土地・校舎、四年制大学等の夢を実現してきた。

前にも述べてきたことではあるが、若い頃私が清水先生に学園の将来計画を作成すべきだということを申し上げた時、清水先生はすべて“プロビデンス”で神様が必要なものは備えられるので思い煩うことは無い

と言われた。今になって振り返ると清水先生は祈ることによって、自分が持っていたビジョンを実現するという強い意思を持っていたと思う。

学園は発展し、現在大
学は8,500名の学生数を抱えるようになったが、一方、整備しても整備しても施設の充実は追いつかない。三到図書館についても閲覧席数は概ね定められている基準数も満たさない状況となってしまった。蔵書数も収蔵可能な数を遥かに超えて、利用率の低い図書は外部に預けなければならない状況となっている。新しい時代のメディアへの対応も不十分である。

このような中で、思い起こすのは、清水先生の強いビジョンに裏付けられた祈りの姿勢である。三到図書館もできるだけ早い機会に、学生の質の高い教育を実現するための国際的水準を満たし模範となるようなラーニングコモンズとして整備しなければならない。何とか学園の中期目標達成の頃を目指して計画に着手し、質の高い図書館として整備をするという強い意思をもって、皆さんと共に神に祈り求めていきたいと考えている。



「三到図書館」設立、40周年を迎えて考えること

図書館長 永瀬 順 弘

今年は、100年に一度とも言われる猛烈な暑さの中で、この夏休みも、ゆっくり読書や研究に打ち込むことが出来なかった学生、教職員も多かったのではないかと、思われます。それでも最近、やっと秋の涼しさが戻ってきて、図書館でじっくり読書や研究をしたい、という雰囲気がでてきました。

ところで、「三到図書館」と名付けられた本学の図書館が設立されてから、早、40年の歳月が経過しつつありますが、最近の大学内における建設ラッシュの陰で、ひとり、昔ながらの景観を保っているのは、最早、この図書館くらいとなりました。まさに本学の図書館は、今や歴史的建造物となっている、といえるでしょう。私も、本学に在職して40年余りになりますが、単に景観に留まらず、最近の大学の変化には、目を見はるばかりで、そのスピードにかなりの戸惑いを肌で感じているところです。暫く大学に来ることがなかった卒業生達が、久しぶりに本学を訪れて、余りの大学の変わりように、一様に驚きを示しているのも当然のことといえるでしょう。

さて、図書館に話を戻しますが、図書館の40年の歩みを見たとき、そこには驚くべき変化があったことを指摘せざるを得ません。いろいろありますが、ここでは以下の二つの点を指摘しておきたいと思います。

まず、大学の設立時における先学の労苦と今日の図書館との関係の問題です。詳しく触れることは出来ませんが、文学部、経済学部の旧文部省への設置申請時には、設置基準に必要な本の冊数が揃わず、あちこち駆けずり回ってやっと申請に漕ぎつけた、というエピソードのあった時代から、今日では、いかに図書・資料を保存するかということと同時に、いかにして処分・廃棄してゆくか、という大学の設立時には、およそ考えることすら出来なかったことが、現実の課題となってきたということです。これは、本学の図書館が余りに手狭になり、図書・資料の外部の保管が約半分近くにも達していることから明らかなように、こうしたことを考えただけでも、新図書館の設立が急務となってきたということです。

また、この40年間で大きく変化したことは、今日まで、技術革新が急速に進み、図書館におけるコンピュータによる文献・検索システムの導入や、オンライン・データベースの普及、書籍のデジタル化など、アナログの時代からデジタル化の時代に急速に突入しつつあるということです。

今年に入って、iPadと言われる電子ブックを利用出来る、便利なデジタル機器が発売され、活字で読むのが当たり前と思ってきた読書形態も、こうした電子ブックの普及で、大きく変化しそうな形勢を見せ始めています。このiPadについては、私も早速予約注文で購入して、実際に利用してみましたが、とにかく、頁送り、文字の拡大・縮小等が自由に出来るなど、メリットが大変大きいと感じました。やはり、今後

iPadに代表される機器による電子書籍の利用の流れは、図書館の利用形態や読書形態にも大きく変化を及ぼさざるを得ないのではないか、という予感のようなものを持ちつつあるところです。（残念ながら、学内での、このiPadの利用は、本学の現在の無線LANでは、本学の一部の建物を除き当面利用出来ないということです、ご注意ください。）

しかしです。こうした技術革新の流れの中で、私が主張したいことは次のことです。それは、いかに技術革新が進み、インターネット、書籍のデジタル化が普及しようとも、伝統的な紙と活字の文化に勝るものはないのではないか、ということです。本学でも、今後の図書・資料のデジタル化に備えて、オンライン・データベース（電子ジャーナルを含む）の充実やNetLibraryの導入などを進めており、利用効率を計れるものについては、大いにその利用を推奨してゆきたいと思いますが、本質的な、内容に深みのある読書や研究を行おうとした場合、少なくとも現状においては、最後の砦は、やはり「紙と活字」ということにならざるを得ないのではないか、というのが私の率直な感想です。

そうは言っても、いきなり難しい活字から読書に入る、ということに抵抗を感じている学生が増えつつあるのが実情のように思われますので、読書のきっかけ、動機は、何であっても良いと思います。それが、テレビや映画をはじめとした映像や画像、iPadの利用による「映像と活字の中間領域」（永瀬）としてのデジタル化された電子書籍でも、入り口は、何であれ問題はないと思いますが、こうした多様なメディアを駆使しながらも、最終的には、活字文化に迫ってほしい、この点で図書館を大いに利用して頂きたい、というのが私の願いです。

以上、私が申し上げたいことは二つです。一つは、大学当局、理事長・学長をはじめとした理事会の構成メンバーに対する要望ということになりますが、学生・教職員へのサービスの充実のために、過去40年の歴史的使命を果たした、現「三到図書館」に代わる、大学の象徴ともいべき新図書館の建設を是非急いでいただきたいということと、あと一つは、特に学生の皆さんには、多様なメディアを利用しつつも、書かれた文字・活字の文化に接する機会を、学生時代にしっかりと身につけていていただきたいということです。今後とも本学の図書館が、学生・教職員の皆さんにとって、さらに充実した、利用しがいのあるものとなるように、図書館職員一同、力を合わせて頑張つてゆくつもりです。



三到図書館（現在の図書館本館）は、2010年にめでたく創立40周年を迎えました。これを機会に、今号では、桜美林大学図書館の小史を、大学の設立やその発展と絡めて振り返ってみることにしました。

歴代の図書館長および桜美林大学で長年にわたって教鞭をとられてきたゆかりの深い先生方の寄稿と、以前に発行された図書館ニュースや図書館の業務日誌から史実をまとめた略年表、図書館の統計資料から見る変化とその分析などから、三到図書館の歩みと変遷を感じていただければ幸いです。

（桜美林大学図書館 歴代図書館長）

図書館長		副館長等	
今井慶蔵	1966-1969年度		
高谷道男	1970-1971年度	花摘睦夫	1970-1971年度
		今井慶蔵	1972-1979年度
西尾示郎	1980-1986年度		
角田史郎	1987-1989年度		
石山 傳	1990-1991年度		
柳生 望	1992-1995年度		
石井 敏	1996-2001年度		
宮下幸一	2002-2006年度	堀 潔	2006-2009年度
永瀬順弘	2007年度-		

典拠：『大学職員録』（廣潤社）※1967年度及び1972-79年度は館長不在

三到図書館の一時代

ビジネスマネジメント学群教授 宮 下 幸 一

（2002年度～2006年度 図書館長）

三到図書館が創建40周年を迎えたと聞いて、実に感慨深いものがあります。創建当時の経緯や前半の歴史については承知していませんが、後半の20年を共に歩み見つめてきました。とりわけ2002年度から2006年度までの5年間は図書館長として、図書館の運営にもあたりました。この記念号の執筆を依頼される光栄を得ましたので、図書館長としての職務を担った当時を振り返りながら、そのとき取り組んだ図書館の“改革”を回想しておくことにします。

桜美林大学は1990年代中頃からとりわけ大きく変貌してきました。太平館の建設をスタートに、栄光館、崇貞館、一粒館、明々館、学而館と、新しい施設や教室棟が作られてきました。そのころ図書館の施設は、現在の本館とメディア室のほかに分館を持っていました。分館は本館の狭隘化に対応するために、雑誌資料を保管・閲覧する施設として今は取り壊されてなくなった亦説館南側の1階に1989年に造られました。

キャンパスの再編計画によって分館の入っていた建物は取り壊しが決まりましたが、その時、分館をどこに移すかは大きな課題でした。各種の提案がありましたが、その時の決断は分館を再度本館に統合するというものでした。すでに図書館の資料は収容能力を超え、外部倉庫に別置されていたこともあり、同じ狭いなら小さくても機能的でサービスの行き届いた図書館に再編するというにしました。

ここにはすでに、前館長の努力によって新図書館の計画が見え始めていました。私の役割もまた新図書館に向けた準備と位置づけられました。そのこともあって、新館に移るまでの限られた時間は、新しい図書館サービスを創造的に担っていける体制の準備に向ける必要性を痛感していたのです。

これに向けた業務のプロセスはまさに改革に値する難事業といわざるを得ませんでした。分館を組み込むスペースを確保するために、本館収蔵の膨大な図書を外部倉庫へと移す作業は、図書の整理と記録を確保しつつの大仕事でした。分館の雑誌資料の本館への移設もまた、本館の物理的構造を考慮しつつの難事業でした。その時の図書館職員の血走った目を今でも思い出します。

一方、小さくても機能的で優れた図書館サービスを提供できる体制作りは、統合の作業に勝るとも劣らない努力を必要としました。まずは優れたサービスを作り上げられるバックヤードの確保と整備が必要でした。狭くても機能的なオフィスは創造的な仕事には欠かせません。職員のアイデアがこれを可能にしました。そこには図書館の無駄を徹底的に排除していく“大掃除”のプロセスがありました。

利用者に対するサービス姿勢の見直しもまた厳しい試練を必要としました。服装のあり方から電話の取り方、適切な言葉遣いの確認も努力の対象でした。真のサービスは職員個人の行動と責任において初めて成立します。図書館職員はネームプレートを着用して利用者のニーズに応えました。ここにはライブラリアンとしてのプライドが見えていました。

図書館のサービス時間の拡大は利用者の強い要望でした。早朝8時半からの開館と夜9時閉館への時間延長、土曜日の通常開館や休館日の縮小は、職員の勤務規定に関わる難しい問題でした。紆余曲折を経ながらも、この解決にはルーチンワークの外部委託を導入することで解決しました。それはまた、専任職員の職務をレファレンス・サービスに集約した高度な能力の要求でもありました。

いま図書館職員は、教員との協力において図書館ガイダンスを年間120クラス消化しています。また必要に応じた高度な利用者サポートを果たしています。その一方で、読書運動プロジェクトを企画・運営するなど、図書館利用を促す発信型の図書館作りにも継続して取り組んでいます。これらの資質は、図書館職員の比類ないプライドが生み出しているのでしょう。この熱く燃える職員や図書館を愛する学生のために、一刻も早い新図書館の完成が望まれます。



書庫から情報センターへ

リベラルアーツ学群教授 石 井 敏

(1996年度～2001年度 図書館長)

私が館長に就任した頃、三到図書館は二つの大きな問題に直面していました。一つは、蔵書が収容能力を超えるようになったため、それをどのように解決するかという問題で、もう一つは、図書館の情報化にどのように対応するかという問題でした。実は、これらの問題を解決するために、私が図書館長に選ばれたのです。

最初の問題は、外部に書庫を借りてそこに蔵書を別置するという形で解決されました。このように言うといかにも簡単なように聞こえますが、実際に実行するとなるとそれほど簡単ではありません。図書利用の利便性を損なうことなく本館所蔵の蔵書数を減らすためには、図書の利用頻度と重要性を考慮して、利用頻度が低く相対的に重要性が低い図書を選別することが必要です。そのような判断は、それぞれの分野に詳しい専門家の判断を必要とします。そこで、図書委員の先生だけでなくそれ以外の先生方を含めて、図書別置のための選書委員会を選んでいただき、それらの先生方と職員の間共同作業を通して図書別置作業が進められました。選書だけの作業に約1カ月かかりました。

二番目の問題は、多様な内容を含んでいます。情報通信革命の進行とともに、図書館はたんなる図書の所蔵と管理の機関ではなく、他の図書館や外部データベースのネットワークからなる膨大な情報源へアクセスするための情報センターに発展する必要があります。また、取り扱う情報も、印刷媒体による情報だけでなく、視聴覚の多様な媒体を含めたものとなってきます。そのような認識に基づいて、その方向に向けていくつかの取り組みを始めました。一つは図書館検索システムの再構築です。ネットワーク処理型の分散処理システムに組み替えることによって、図書館内部だけでなく、学内・学外のどこからでも蔵書検索ができるようになりました。二つ目は外部データベースとの接続で

す。これは学内ネットワークの進展とともに拡充されていくことになりました。三つ目はビデオ、CD、DVDなどの視聴覚資料の利用センターの設立です。図書館のホームページが初めて作られたのもこの時期でした。



この時期にもう一つ大きな変革が進められていました。図書館の専門的な職員の採用です。国公立大学図書館で長年経験を積んでこられた人たちを退職後、三到図書館に迎え入れ、図書館機構の整備と若手職員の教育に力を発揮してもらおう一方、はじめから図書館職員採用と明示した採用人事をすることによって、現在中核となっている若手職員層を作り上げていきました。現在の図書館が、情報化の進展に合わせて発展し、レファレンスサービスの向上も実現しているのは、このような中核的職員の地道な努力を抜きにしては考えられません。

三到図書館は、桜美林大学・短期大学あわせて学生数が3,000人規模の時に作られた図書館です。現在のように学生数が8,000人を超え、情報化が急激に進んでいる状況では物理的限界に直面しています。これ以上の図書館サービスの向上には、大きく機能的な新しい図書館がどうしても必要です。私の時代にも新図書館建設の必要性を訴え、図書館内部でも準備委員会を作ってその実現に努めたのですが、残念ながら現在に至ってもそれが実現していません。図書館は大学の教育と研究の中核を担う施設です。桜美林大学のさらなる発展を実現するためには、新しい図書館の早期建設がぜひとも必要です。

全90巻のトルストイ全集のことなど

リベラルアーツ学群教授 大 木 昭 男

本学の図書館には、1928年から1958年までの30年の歳月を費やしてモスクワで刊行されたロシアの世界的な文豪レフ・ニコラーエヴィチ・トルストイの全90巻の全集が所蔵されている。これはトルストイ生誕100周年を記念して刊行された国家的出版事業の成果であり、これ以上充実した全集は、今年のトルストイ没後100周年を記念してロシア本国で出されるという100巻全集が完成するまでは現在のところないし、少なくともあと数十年はないであろう。我が国の大学図書館でも、この90巻全集は、露文科やロシア語科のある少数の大学図書館を除いて、所蔵されてはいない。したがってこれは本学図書館の誇るべき宝であり、わたしにとっては、これあるがゆえに本学図書館はまことに貴重にして愛すべき図書館となっているのだ。この全集購入にあたっては、40年前の思い出がある…

創立間もない桜美林大学に助手として赴任した当時、熱川にあった桜美林セミナーハウスで、夏のキリスト教修養会が行われ、わたしもこれに参加した。その席上で自己紹介したときに、わたしは自分がロシア文学を専門とするに至った動機として、トルストイについて語った。わたしの高校時代に米川和夫氏が角川書店から翻訳刊行したばかりのトルストイの『人生論』を買って読み、そこに書かれている「愛は生命そのものだ」という言葉にいたく感激したのであった。この書がわたしをロシア文学に近づけたのであり、キリスト教に接近するきっかけともなったのであった。その後この書の題名は、「生命論」と訳すべきものだということを知ったが、ここに述べられていたトルストイの考え方は、わたしの人生観に大きな影響を与えたのであった。そんな話を自己紹介でしたところ、その場におられた本学創立者の清水安三先生がわたしのところに来られて、先生の同志社大学神学部在学中に小西増太郎に教えを受けたことや、『トルストイの内面生活』と題する卒業論文をお書きになったことなど話して下さったのである。最近になって、ご子息の清水畏三氏にこの卒業論文の所在を問い合わせたが、残念ながら行方不明とのことである。それはともかく、本学の若き日の創立者がトルストイアンであったことを知って大変嬉しく思った。

熱川での修養会があった翌1970年、大阪万博が開催された。このとき安三先生はソ連館を見学なさり、入り口正面にトルストイの畳2枚ほどの大きな肖像写真にいたく感激なさったらしく、あの肖像パネルを万博終了後に本学に寄贈してもらえないだろうかとの相談され、ソ連館館長宛てに手紙をお書きになった。それをわたしがロシア語に翻訳して郵送したところ、思いがけず安三先生の要望がかなえられ、大阪からトレーラーで運ばれてきたのであった。トルストイのほかにマヤコーフスキイやオストロフスキイの肖像パネルもあった。これらは長いこと図書館のロビーに掲げられていた。このニュースが毎日新聞で報道さ

れ、この記事を見た神田のロシア語図書専門店ナウカ社がトルストイの90巻全集の売り込みに安三先生のところに来てきた。ナウカ社はこれをつけてきたが、安三先生は10万円値



切って100万円で買い取られた。その交渉術を脇で聞いていたわたしは、近江商人的したたかさを感じさせられたのであった。感心したことに、その100万円は、大学の経常費からではなく、安三先生ご自身のポケットマネーからの支出であった。開館されて間もない当時の本学図書館には、これといって特に目ぼしい蔵書がなかっただけに、安三先生ご寄贈の90巻全集が書架に納められたときは一段と光り輝いて見えたものである。その後文部省からの査察官などが図書館を訪れるたびに、安三先生は真っ先にこの90巻全集の鎮座する書架を見せて、彼らを唸らせたものである。

さらに先生は、日本語版のトルストイ全集が図書館にまだ置かれていないことを聞いて、ご自分の書齋に愛蔵されていた河出書房新社の18巻からなるトルストイ全集（中村白葉、中村融訳）をも図書館に寄贈なさったのであった。あのまま順調にゆけば、本学にロシア語ロシア文学科もできたであろうが、諸般の事情で当初の計画は頓挫してしまった。その後の世界と日本の政治・経済情勢を考えれば仕方の無いことであった。

今日、非戦論者であったトルストイ思想の影響を受けた創立者清水安三先生のお考えを、建学の精神からしてうかがい知ることができる。それは、近隣諸国から、日本が真に“beloved nation”として認識されるようなパシフィストの精神をもった国際人の育成をめざしている点である。戦争の永久放棄、戦力の不保持、交戦権の否定を謳った憲法第9条こそは世界に誇るべき条文であって、この精神に徹することこそ創立者の意にかなった本学の高邁なる教育理念であろう。非暴力主義を讃えたトルストイの影響と思われるもう二つの点を指摘しておこう。その一つは、一般に「武道館」と呼ばれることの多い柔剣道道場の名称が、本学では戦を止めることを徳とする意味で「止戈徳館」と命名されていることであり、もう一つは、「復活の丘」の存在である。「復活」という理念こそは東方正教の掲げる至高の理念であり、トルストイ晩年の名作が『復活』と題されていることから察しられよう。「復活の丘」こそは、本学図書館所蔵のトルストイ90巻全集とともに、本学のシンボリック的存在なのだとわたしは思っている。（2010年8月15日の終戦記念日65周年を前にして）

桜美林図書館と摂理

リベラルアーツ学群教授 新 藤 泰 男

本学の図書館との関わりで思い出深いことが三つある。

その一つは、1989年のことであったが、ボナペ島でのワークキャンプへの誘いがキッカケとなった。初めて聞く名の島であったが、調べてみると驚いたことに、本学図書館にこの島の宣教についての本があった。田中栄子編著『優しいまなざしーボナペ島宣教二十五年』（1980）である。同書によれば、ボナペ島の宣教は、1851～1887年はアメリカンボードにより、1899～1918年はドイツ・リーベンゼラ・ミッションにより、そして、1919～1945年は日本によるものである。当時の霊南坂教会牧師小崎弘道氏により南洋伝道団が組織され、著者の父、田中金造氏は同志社大学神学部卒業後、近江八幡のヴォーリス師のもとで教会を牧していたが、1919（大正8）年10月、ボナペ島の初代宣教師として赴任したのであった。日本におけるリーベンゼラミッションの働きにかつて多少関わっていた私は、トラック諸島やヤップ島への宣教に関心を持っていたため思い切って参加することにした。現地で印象に残ったのは「肌の黒いマリア像とキリスト像」であった。西洋の宣教師たちにより宣教されたキリストは、もはや西洋人の神ではなく「ボナペ島民として受肉した神」になっていたのだ。異なる習慣や伝統を超えてもたらされた福音が、特定の風土という時空間にどう現実化するか、に関心を持っていた私には大きな衝撃であった。

第二は、創立者清水安三氏の書かれた「東洋的基督教の提唱」（『開拓者の精神』1940 所収）との出会いであった。同氏は、その中で中国人牧師を以下のように高く評価している。「彼らには、西洋臭いところがない。頭の中で、中国従来思想、信仰をキリスト教化し、キリスト教的くふるい>にかけ、キリスト教的くメッキ>をし、あるいはキリスト教的くやき直し>をしている」、これが中国現代キリスト教だ、と言う。この「ふるい」、「メッキ」、「やき直し」等の言葉も検討せねばならないが、その意味することは、中国に「西洋キリスト教」を打ち立てるのではない。真に打ち立てられるべきは、西洋色を脱したキリスト教が中核となり、中国人の血にもなり肉ともなり得る、

「中国キリスト教」だ、ということである。考えてみればこのような過程は、西洋人が西洋人の思考方法と精神的・文化的状況（コンテキスト）の中で聖書を読み解釈し、彼ら独自の「西洋キリスト教」を樹立してきたことを考

えれば当然のことなのである。そしてこのような清水安三氏の精神と姿勢は、不思議なことだが、同じように大陸を経験した作家遠藤周作氏の宣教論の中にも見られ、また大変興味深いことに、当学園の理事長・大学長佐藤東洋士氏の尊祖父、佐藤定吉氏の諸活動にも見られる。同氏は東京帝国大学在学中に本郷弓町教会にて海老名弾正氏より受洗、東北帝国大学理科大学教授に任ぜられ学者としての道に励むと共に、キリスト教の学問面からの伝道活動にも熱心であった。「全東洋をキリストに」の召命を受け、生涯を「日本キリスト教」に捧げたのであった。（参考：『佐藤定吉先生追想録』新教出版、1970）

第三は、足尾鉍毒事件における田中正造研究である。私と田中正造との出会いは、日本の近代化と自由民権運動とのかかわりを研究している中で、町田市野津田の「自由民権資料館」を訪ねた時であった。地元の自由民権家、石阪昌孝や村野常右衛門、北村透谷と石阪美奈等の活動と共に、自由民権運動家として足尾鉍毒事件解決のため一生を捧げた田中正造に大変惹かれた。そして本学の図書館に「田中正造全集」をはじめ研究書も多数有り、特に当大学に在職しておられた方の著書、満江巖著『田中正造：その生涯と思想』（1961）があることを知ったときには、心に踊るものを感じた。この足尾鉍毒事件を通じて、渡良瀬川沿岸の町史や郷土史への関心、また公害へのキリスト者の様々な取り組み方、そして社会の発展に伴う光と影に対する政府のとりべき姿勢等、この研究は前二つの課題と共にパウロ・ティリヒの「文化の神学」を軸にして今日もお続けている。



三到図書館に育てられて

大学院言語教育研究科教授・大学院部長 小 池 一 夫

1970年6月1日（月曜日）に現在の図書館が開館した（当時、私は英語英米文学科3年に在籍していた）。新旧の図書館を利用した者の一人である。現在の図書館が完成し、館内いたるところで塗装の匂いを嗅ぎながら、新図書館の完成を心より喜んだ日のことが懐かしく思い出される。当時、各階の書棚に立てられていた本の数はそれほど多くなかった。そのため館内が広々と感じられた。威風堂々とした図書館をキャンパスの中央部に据えることになった本学を誇らしく思ったのは私一人ではなかったと思う。

図書館は、大学にとって教育と研究を支援するという重要な役割を担っている。学生の中から三到図書館の常連客であり続けた。母校で教壇に立つ現在の私に育て上げてくれたのは、本学の図書館であったと言っても決して過言ではない。現在では、文献コピー機、コンピュータによる学内外の文献検索、データベースの利用、ノートパソコンの貸出など、学習や研究を行う上で、種々の優れたサービスを図書館で受けられる。私が学生の頃と比べれば隔世の感がある。

昨今、多量の資料を容易く複写することができる。だが40年前には、そのような便利な機器は存在せず、書籍体の文字情報を、すべてノートに書き写したり、要約を書き記したりすることの繰り返しのごく当たり前であった。読んで考え、考えながら書き取り、書き写しながらさらに考えるという知的作業の連続であった。その作業の間に、そこに書かれている大半の内容が理解でき、記憶された状態になっていた。これらの作業に長時間を要したが、決して時間の浪費ではなかった。自分の目で確認して、脳を通過させた情報を、自分の手を用いて表出する（＝手で覚える）という作業を通じて、その多くが確実に記憶に留まっていた。現在のような情報過多の時代にあっても、情報の洪水に押し流され、思考や熟慮という大切な行為が片隅に追いやられてしまっているのではないだろうか。

実際に本に指を添え、インクの匂いに心地よさを感じながら、個々の文字を目で追って、文字という記号に秘められ意味を解説し、そこから知識を吸収し、学識を深めるという行為は、長い年月をかけて人類が培ってきた最良の方法であると同時に、最も効果的な知的作業である。情報の伝達や記録媒体は時間と共に変化しているが、人類の英知を、私たちの思慮・思考の

証を収納して広く公開するという重要な任務が図書館には課せられている。

図書館の蔵書に書き込みや下線が引かれているのを時々目にするが、とても迷惑なことである。必要な本は自費で買って、読破しようと必死に勉強

したものである。自分の本であれば、気兼ねなく書き込みや下線を引くことができる。そうすることで本への愛着や本との一体感が一層増すのである。文字の私語から解放されて本は読み進みたいものである。図書館の利用に関するマナーを教えることも大事な教育だと思う。

当時は、今のように種々の情報が容易く手に入らなかった。そのために図書館を利用する人々は乏しい情報を必死に手さぐりで探して収集しようとする熱気に満ちていたように思う。電子管理システムが導入される以前には、本の裏表紙の内側に利用者カードが添付されていて、本を借り出した者の名前がそのカードに記録されていた。その本を以前に誰が、何人が借りたのか。本の内容とは別の興味が湧いた。知人の名前が記載されていれば、なるほどと納得したり、時には意外に感じたりもした。「自分の書棚の本を他人に見られるのは、自分の裸を見られるのと同様に恥ずかしいことだ」と語ったある評論家のことばがふと思い出される。

本を読むことで、思考力や想像力を高め、理解力を強化させ、ものを一層深く考える習慣を身につけさせるという副次的な収穫が得られると思う。時間の経過に伴って情報伝達の媒体は進化しているが、それを活用する人間の本质はほとんど変化していない。いつの時代にあっても図書館には能動的な役割が大いに期待される。図書館の存在とその機能は、研究・教育機関としての大学にあっても、教えを受ける教員、その教えを受ける学生、そして教員ないし学生に情報提供を行う図書館は、「三位一体」の関係にある。本の記録媒体（＝形体）が印刷体から電子体になっても、それに十分対応し得るサービス精神の旺盛な図書館であり続けてほしいと切に願っている。



三到図書館のあゆみ

	図書館のあゆみ	大学のあゆみ
1965年3月	時習館(大学図書館としての最初の図書館)落成	
1966年4月		桜美林大学(文学部英語英米文学科、中国語中国文学科)を開学
1968年4月		大学に経済学部経済学科を開設
1970年6月	三到図書館(3階建6層:地上6階建:2,488.05㎡)開館	
1972年4月		大学の経済学部に商学科を増設
1978年11月	木村半兵衛家古文書受贈	
1979年6月	「図書館利用のワークショップ」実施	
1983年7月 8月	「三到図書館ニュース」創刊号発行。巻頭言:学園創立者・学長 清水安三 三到図書館改修。1階の中・高図書室が「念書用功館」落成により移転。改修後 □□書架の拡充 □□事務室の統合(3階と5階の事務室を統合し、3階南側に移設) □□山本文庫(本学名誉教授 山本文之助先生からのトマス・ハーディ・コレクションを中核とする寄贈図書)・マイクロ資料室・ゼミ学習室を5階に設置 □□+ □□□□ブラウジングルーム(新聞・雑誌)を1階に設置	
1984年4月	「指定図書制度」導入	
1986年10月	山本文庫公開披露式(10月17日) トマス・ハーディ(1840-1928)の著書、研究書など約1,000部、並びに、 ハーディに、或いはハーディが影響を与えた著作、その他関連資料約6,000部 を収容。『山本文庫目録 第1部』あり	
1989年4月 5月	図書館分館開設(学而館1階部分を「図書館分館」とし、三到図書館の1階、2階 にあった新聞、雑誌、年鑑・白書等逐次刊行物を移動)	大学に国際学部国際学科を開設
1993年1月	統合図書館情報システム「DOBIS」(IBM社)を導入	
1993年4月	大型コンピュータ導入の前処理作業に着手(目録カードと蔵書の確認突合、 遡及データ入力、バーコード貼付等)	大学院国際学研究科修士課程を開設
1994年4月	バーコード読取りによる図書の貸出開始 和書約70,000冊、洋書約27,000冊の蔵書がOPACで検索可能になる 事務室にオンライン端末を3台設置し、購入資料の目録作成開始	
1995年4月	中国語・朝鮮語・ロシア語・特殊言語を除く全蔵書(約270,000冊)がOPAC で検索可能になる	大学院国際学研究科博士後期課程を設置
1996年4月	学内LANを敷設 開館時間の延長 三到図書館(本館) 平日9:00~20:00 土曜日9:00~17:00 (分館) 平日9:00~16:30 土曜日9:00~14:00	
1997年1月 3月	三到図書館・分館のパソコンから、学術情報センター総合目録データベース に接続し、図書・雑誌の所蔵館がオンラインで検索可能となる 外部別置1(和・洋図書、製本雑誌、和装本 計56,483冊)実施。デリバリー:週2便	
1997年4月		大学に経営政策学部ビジネスマネジメント学科を開設
1999年9月	図書館情報管理システム「LIMEDIO」(リコー)を導入し、図書館用光ファイ バーLAN(100Base)を敷設。Web上からの蔵書検索が可能となる(但し 中国語・朝鮮語・ロシア語・特殊言語は目録カード) BDS(Book Detection system:不正持ち出し防止装置)を導入	
2000年4月		大学の文学部に言語コミュニケーション学科、健康心理学科、総合文化学科を増設
2001年3月	木村半兵衛家文書(308点)を栃木県立文書館に寄託 大韓民国韓瑞大学校に本学蔵書約2,000冊を寄贈(本学との交流協定締結記念)	
2001年4月	情報メディア室(視聴覚資料)館内利用開始 新宿キャンパス 図書デリバリーサービス開始 DLS(CD-ROMサーバ)導入 朝日・日経新聞、MAGAZINEPLUSのオンラインデータベースを導入 図書館のホームページをリニューアル	新宿キャンパスを開設 大学院国際学研究科に大学アドミニストレー ション専攻、言語教育専攻の各修士課程を増設



図書館に開館当初からの業務日誌が保管されている



現在ではほとんどみられなくなった目録カード

2002年4月	「桜美林短期大学・大学図書館」を「桜美林大学図書館」に改称 情報メディア室(視聴覚資料)開架式利用と館外貸出開始。対面朗読室開室 (平日:9:00~17:45、土:閉館) ProQuestをCD-ROMからオンラインデータベースに移行	大学院国際学研究科に人間科学専攻修士課程、 老年学専攻修士課程を増設
8月	外部別置2(和・洋図書、製本雑誌、和装本 計60,037冊)	
9月	「LIMEDIO」が多言語対応となる	
10月	中国図書約27,000冊のデータを「LIMEDIO」に遡及入力開始	
2003年3月	博物館学研究者・鶴田総一郎氏(1918-1992)蔵書約15,000冊を受贈 (本学の浜田弘明教授により整理され其中館の「桜美林資料展示室」にて公開中) 「資格・就職本コーナ」「旅の本コーナ」設置	
2003年4月	地域開放サービス開始(館内での閲覧・複写利用) 相模原市立図書館と桜美林大学図書館の相互利用に関する協定締結 新宿キャンパス大学院生を対象に図書館オリエンテーションを開始	プラネット淵野辺キャンパス(PFC)を開設
6月	逐次刊行物検討委員会発足(2003年度~2006年度)	
11月	図書館HPからの文献複写の申込受付開始	
12月	中華人民共和国教育部 書籍授与式(12月5日) 中日友好プログラムの一環として、中華人民共和国教育部から中国書籍 約1,200冊を受贈。在日本国中華人民共和国大使館臨時代理大使 程永華氏 より、佐藤学長に図書目録が手渡される。この他3名の大使館関係者並びに 光田明正長崎外国語大学長が出席	
2004年4月		大学院国際学研究科に老年学専攻博士後期課 程、大学アドミニストレーション専攻修士課 程(通信教育課程)を増設
6月	外部別置3(図書10,557冊)実施	
7月	三到図書館耐震工事(7月30日~9月12日)。館内の強度補強、トイレ改装、身 障者用トイレの設置、車椅子用リフトを外階段に設置、図書館入口の自動 ドア化、入館ゲート・図書館内のパソコンのリニューアル	
2005年2月	外部別置4(洋書他27,343冊)実施	
2005年4月		大学に総合文化学群を開設
8月	外部別置5(1/2)(和書・中国書 44,911冊)実施	
9月		大学に日本言語文化学院(留学生別科)を開設
2006年2月	外部別置5(2/2)(製本雑誌5,144冊)実施。外部別置総数 204,475 冊 デリバリー対応を週3便に変更	
3月	分館の事務室、資料を三到図書館に移設(図書館分館閉鎖)	
2006年4月	地域開放サービスを拡大(館外貸出サービス開始) 三到図書館の受入・発注業務、整理業務、貸出・返却カウンター業務を委託 ビジネスマネジメント(BM)学群1年生の基礎演習「ビジネスの基礎」での 図書館ガイダンスを開始(初年度は26クラスで実施) 「桜美林大学図書館 読書運動プロジェクト」始まる 図書館内で利用できるノートパソコンの貸出サービス開始 データベース講習会実施	大学に健康福祉学群、ビジネスマネジメント 学群ビジネスマネジメント学類を開設
2007年4月	リベラルアーツ(LA)学群1年生の基礎演習「LAセミナー」での図書館 ガイダンスを開始(初年度は68クラスで実施) 読売新聞オンラインデータベース導入 図書館HPからの購入希望の申込受付開始 デリバリー対応を週5便に変更	大学にリベラルアーツ学群を開設
2008年4月	四谷キャンパス図書室 開設 四谷キャンパス図書室および情報メディア室の貸出・返却カウンター業務を委託	四谷キャンパスを開設 大学院に老年学研究科老年学専攻博士前期課程・博士後期 課程、大学アドミニストレーション研究科大学アドミニ ストレーション専攻修士課程並びに同通信教育課程を開設 大学にビジネスマネジメント学群アビエーションマネジメント学類を増設
6月	「図書館の利用に関するアンケート」を全教員に実施	
2009年4月	毎日新聞オンラインデータベース導入。これにより四大新聞データベースが揃う	大学院に国際学研究科国際協力専攻、経営 学研究科経営学専攻、言語教育研究科日本 語教育専攻・英語教育専攻、心理学研究科臨 床心理学専攻・健康心理学専攻の各修士課程 を開設
7月	オンラインデータベース検討委員会発足 基盤教育院のアカデミックガイダンス科目の授業において図書館の使い方 のガイダンスを行う連携授業を開始	
10月	図書館内に防犯カメラ設置	
2010年4月	NetLibrary(電子書籍)導入	
10月	電子ジャーナル管理ツール リンクリゾルバ導入	

桜美林大学としての図書館

図書館事務長 石 崎 栄 子

前頁の年表「図書館のあゆみ」に見るように、三到図書館は1970年に建設されるが、大学図書館として充実するのは、1983年に中高図書室が移設し、全館を大学・短大の図書館として改修後のことである。『三到図書館ニュース』『参考図書目録』『検索の手引き』等を発行し、「図書館ワークショップ」を実施した。その後1990年代に入り準備期間を経た後、1997年本学図書館は、学術情報センター総合目録データベースに接続し、自館の蔵書検索をはじめ、図書・雑誌の所蔵館をオンラインで検索することが可能となった。1999年には、現行の図書館情報管理システムを導入し、図書館用光ファイバーLANを敷設した。

図書館分館の統廃合、分散化した視聴覚資料の集中化を経て、現在は町田キャンパスに三到図書館と情報メディア室、四谷には三到図書館の分館として四谷キャンパス図書室がある。また、この間収蔵スペースの狭隘化が進み、蔵書の約20万冊を外部に別置している。このように現在の図書館は、40年前には考えられなかった様相を呈している。図書館の規模、利用状況等がどう変わってきたか、当時の資料を紐解きながら振り返ってみたい。



大学創立時からの図書館の変化

創立時を参考に完成年度（第1期生が卒業する年度）の1969年度と現在（2009年度）を表にして比較すると、次のようになる。

(表1-1) 蔵書数と利用状況

年度 (調査対象)	① 司書 職員	蔵書冊数		開架 冊数	年間受入冊数		雑誌定期受入種数				新聞定期 受入種数		入館者	館外 貸出 冊数	奉仕 対象 学生数	③年間 開館 日数	決算 (千円)							
		総数	うち 洋書		和	洋	和		洋	購入	寄贈	購入					寄贈	②和	洋	総額	うち 資料費	うち 図書費	うち 新聞・雑誌費	うち 電子ジャーナル等
							購入	寄贈																
1966 (S.41)	3	30,307	12,676	3,208	2,304	734	39	13	31	7	21	1	4,768	1,060	308	227	4,799	1,937	1,776					
1969 (S.44)	11	44,415	18,770	43,308	2,977	1,414	92	214	90	19	61	9	24,712	2,094	3,735	327	7,910	4,656	4,281					
2009 (町田)	※※ 8	※※ 507,238	※※ 126,876	※※ 238,355	11,311	1,649	921	2,049	383	32	32	17	120,096	65,399	9,296	274	228,270	131,565	59,172	32,921	25,029			
2009 (四谷)	全委託 職員	7,013	1,308	7,013	853	164	20	53	15	0	4	3	10,831	3,246	108	314								

出典：『日本の図書館1967』『日本の図書館1970』（日本図書館協会発行）

(注) これらは全て大学のみの数字であるが、*及び**は短大が募集停止のため短大を含めた数字である。

(表1-2) 蔵書数と利用状況

年度 (調査対象)	④蔵書総数に 対する洋書	⑤蔵書総数に 対する 開架図書冊数	⑥奉仕対象学生 1人当りの 入館数	⑦奉仕対象学生 1人当りの 館外貸出冊数	⑧1年間に 対する年間 開館日数	⑨決算総額に 対する資料費	⑩資料費に 対する図書費	資料費 に対する 新聞・雑誌費	資料費 に対する電子 ジャーナル等
1966 (S.41)	41.8%	10.6%	16回	3冊	62.2%	40.4%	91.7%		
1969 (S.44)	42.3%	97.5%	7回	1冊	89.6%	58.9%	91.9%		
2009 (町田)	25.0%	47.0%	13回	7冊	75.1%	57.6%	45.0%	25.0%	19.0%
2009 (四谷)	18.7%	100.0%	100回	30冊	87.2%				

出典：『日本の図書館1967』『日本の図書館1970』（日本図書館協会発行）

(表1-1) ①2009年度職員は、業務（一部）の委託化により減少している。

② 寄贈の新聞が減少したためと思われる。

③ 1969年度は授業期間の日曜日を開館していたが、現在日曜日は休館しているため減少している。

1969年当時は、学内にいくつかの寮があり、寮生の利用が多かったようである。当時の日誌によると、平日も夜9時まで開館していたことが分かる。

(表1-2) ④ 町田・四谷合わせた割合でも24.9%であり、1969年度より半減している。本学では、学生用図書を軸とした選書方針であり、読書推進のため2001年度からの8年間は制度的に書評本（ほとんどが和書）を入れてきたことも比率が低下している要因の一つと思われる。『日本の図書館2009』^{注1)}によると、2008年度全国私大の平均は、29.1%である。

⑤ 2009年度は収蔵スペースの狭隘化により、約20万冊を外部に別置（取寄せサービスにより翌日利用可能）しているため、開架図書の比率は減少している。

⑥、⑦ 1969年度より増加しているが、資料はいわゆる“本”だけではなく、web上で利用できるデータベース、電子ジャーナル、電子書籍などが導入され、キャンパス内からこれらを利用できる。また、蔵書検索、貸出延長、購入希望などもweb上から行うことができ、この点において図書館は非来館型となっている。この数字のみが、利用状況を表すものではなくて来ている。『日本の図書館2009』によると、⑥の全国私大の平均は40回、⑦は8冊である。

⑧ 表1③と同じ

⑨ 1969年度より1.3%減少している要因は、決算総額の約4分の1が三到図書館、情報メディア室、四谷キャンパス図書室に関する業務委託費で、これらを除くと2009年度の決算総額に対する資料費の比率は、1969年度より高いことが分かる。

⑩ 2009年度は、資料費に対する図書費の割合が45%で、40年前に比べると半減しているが、「図書」「新聞・雑誌」「電子ジャーナル等」の合計が89%、その他は資格就職本などの消耗図書である。1969年度は資料費の約92%が図書費、8%が新聞・雑誌などであったが、今日では図書とほぼ同額が新聞・雑誌・電子ジャーナル・電子書籍であり、資料が多様化している。

このように40年を振り返ると、大学の拡大と共に図書館も成長しているが、2009年度の町田・四谷キャンパスを合わせた学生一人当たりの図書館資料費は13,990円、図書費は6,292円であり、『日本の図書館2009』によると、学生一人当たり図書館資料費は21,792円、図書費は8,718円である。収蔵スペースが限界を超えていること等も影響しているが、全国584私大の平均から大きく下回っている。

図書館の充実とこれから

今日、大学図書館ではアウトソーシング化が進み、本学でも貸出・返却カウンター業務、資料受入・整理業務を委託し、職員の業務は、広報、図書館システム管理運営、レファレンス、利用ガイダンス、業務委託スタッフのマネジメントなどに特化したものとなっている。大学図書館の使命は、大学における教育・研究、生活および地域貢献などの活動に対する情報面の支援であるが、その支援には二つあり、一つは資料・情報提供サービスであり、もう一つは図書館利用教育である。

「資料・情報提供サービス」としては、全蔵書、逐次刊行物、視聴覚資料の他、現在では、オンラインデータベース（学内及び一部はインターネット環境下の学外からも利用可能）、電子ジャーナル、電子書籍なども導入している。全蔵書の約半分の止むを得ず別置するなど、収蔵スペースの狭隘化が進んでいる本学でも提供できるサービスとして、電子資料については今後も更なる充実を図りたい。

「図書館利用教育」は、本学では1983年、学生自治会の代表が要望して実現した「図書館ワークショップ」がある。図書館利用教育に関しては、日本図書館協会の中に「日本図書館協会利用者教育臨時委員会」が発足したのが1989年（「図書館利用教育委員会」に改称、常設委員会となるのは1993年）、「図書館利用教育ガイドライン」（大学図書館版）が協会で正式に承認されたのは、1998年であったことを考えると、本学の図書館利用者教育は、かなり早い時期だったと言える。

「図書館利用教育」については、取組んだ時期は早かったが、途中中断した時期もあり、体系的、組織的に取組んできていない。しかし、今日では初年次の導入教育の支援として、2006年度からビジネスマネジメント学群「ビジネスの基礎」で、2007年度からはリベラルアーツ学群の「LAセミナー」で、図書館利用教育を行っている。また、2009年度からは、基盤教育院の一部ではあるが、熱心な教員により「大学での学びと経験」の1コマを、授業に組み入れた形で、図書館利用教育を行っている。

これからは、一部ではなくできるだけ多くの学生をより自立した情報の担い手とすること、図書館利用教育を大学の教育の中に根付かせることを高い目標としたい。

注1)『日本の図書館2009』（日本図書館協会発行）には、2008年度の全国584私立大学936館（本館・分館）の統計が収録されている。現時点では『日本の図書館2010』は未発行のため、最新版である『日本の図書館2009』を用いた。

私と桜美林三到図書館とのつきあい

大学院国際学研究科 環太平洋地域文化専攻 姜 成 山

2006年秋に中国東北師範大学を卒業してから、桜美林大学院に留学している姜成山です。以来桜美林三到図書館にはいろいろお世話になっています。

実は東北師範大学で勉強していた時から、大学の図書館によく通っていました。私が大学に入学したとき、ちょうど東北師範大学の図書館はリニューアルを終えたばかりで、その敷地面積はアジアでも有数の大学図書館でした。地下まで含めて8階建ての立派な図書館でした。

授業や雑用以外の昼はほとんど図書館で過ごしていました。平日は朝7時から開館しますが、6時半からもう列ができて、いい座席を取ろうとみんな一生懸命でした。夜は10時に閉館しますが、9時55分になると図書館はまさに盆季節の羽田空港ターミナルのように寮帰りの学生で込んでいました。特に、期末試験のシーズンを迎えると、図書館はいつも満員で座席一つを確保するのに目一杯でした。図書館で勉強し、調べるというのは、大学時代にもう当たり前のようなことでした。

しかし、レポートや論文を書くときいつも残念に思っていたことがありました。それは260万冊の蔵書を誇る図書館ではありますが、関心を持ったテーマを調べると、すべての資料を確認しきれないところでした。市販されている本や雑誌なら何とか求めることができますが、他大学や研究所の資料なら、伝手のない学生の手には容易に入手できませんでした。

このような自主学习、自習研究が好きだった私にとって、4年前より通いはじめた桜美林三到図書館は、まさに上記した悩みを一掃するシステムを持っている図書館です。敷地面積は東北師範大学図書館と比べると小さいし、学生の利用数もまったく比べものにはありませんが、この図書館の資料収集システムはすごいものがあります。

そのシステムは大きく分けて2点あります。一つは

オンライン上、一つはペーパー上でのシステムです。

いわゆるオンラインシステムというのは、あるテーマを調べはじめるとき、とりあえず図書館ホームページのOPACでリ

サーチするわけですが、もし桜美林図書館に書籍がない場合はすぐ購入希望を出せるし、雑誌がない場合にはすぐ文献複写を頼むことだってできるんです。図書館のサイトではMAGAZINEPLUS、GeNiiなどのデータベースも充実しているので、テーマと関連する記事の情報をすぐ確認でき、必要な資料を入手することができます。実はこの4年間にこのオンラインシステムを使って集めた資料は何と数百に達しています。

次はペーパーシステムです。オンラインシステムはわりと最近の資料を集めるのに適していますが、少し古い資料ならまだ足りないところがあります。古籍や絶版の本などは、どうしても購入希望では入手できません。その時使えるのが「図書貸借サービス」です。他大学に所蔵している書籍を桜美林図書館から借りて閲覧できるようになっています。また、貴重な図書など先方の図書館から借りられない時は、紹介状を受け取って直接他大学の図書館に出向くことができるのもこのサービスです。

自分が調べたいものがあったら、まず浮かび上がるのが桜美林図書館、そしてほしい資料は様々なサービスを利用して入手できる。入手した資料をインプットし、テーマに対してより一層深く認識できたら、さらに別の資料がほしくなり、図書館の資料収集システムがまた脳裏をよぎる。これが日ごろの私と桜美林三到図書館とのつきあいです。



図書館探検

リベラルアーツ学群4年 上田文穂

私は授業の合間に、桜美林大学の図書館でアルバイトをさせていただいている。毎年、新学期が始まると、初々しさを伴った新入生と思しき学生たちが、赤いエプロン姿の私に向かって、図書館のあれこれについて質問をしてることが多い。例えば、探している資料の場所や蔵書検索の方法、時にはトイレや出入り口の場所を聞かれることもある。その様子に、なんとなく微笑ましさを覚えながら案内していると、私も初めてこの図書館を訪れたときは、むやみに歩き回って、探している本が見つからなかったことを思い出す。

桜美林大学の図書館は6階建てだ。移動手段は階段のみ。ちなみに出入り口は3階で、トイレや閲覧用の机は奇数階のみにある。造りも多少入り組んでおり、小さな部屋が幾つもあったり、階段が数か所にあったりして、慣れないうちはわかりづらいところも多い。狭い本棚の間を通り抜けたり、息を切らして最上階に登ったり、頭上にある本を台に乗って取ったりしていると、大げさかもしれないが、どこか探検でもしているような気分になってくる。図書館は、無数の本を媒介にして、未知の世界、無限の世界に繋がっていることを思えば、確かに立派な探検と言えなくもない。

そんな図書館探検には、実は幾つもの技術が必要だ。蔵書検索用パソコンを使えば、無駄に動き回らなくて目当ての本の場所がすぐわかるし、オンラインデー

タベースを使えば、論文や、新聞・雑誌の記事を簡単に閲覧することもできる。また、桜美林大学図書館に置いていない本でも、他の大学図書館から貸借や文献複写で手に入れることもできる。そんなわけで、図書館に行けば手に入らない資料など、ほとんどないのだ。

ここで紹介したのは技術のほんの一部で、もっと詳しく知りたい方は「図書館ミニツアー」に参加するとよいと思う。春学期の昼休みなどに開催されているので、積極的に参加してみてはいかがだろうか。

大学での勉強に必要な資料を探すときには、テーマに合ったものをできるだけ迅速に手に入れるべきなので、図書館探検の技術をどんどん活用してほしい。だが、それ以外のときはぜひ自分の足で、迷いながらもじっくり図書館探検をしてみしてほしい。そうすれば図書館のことが自分なりにわかってくるし、案外好きになってくるかもしれない。そして、ふと目を本棚に向けたその先に、素敵なタイトルが見つかるかもしれない。「図書館はわかりにくい」なんて言っていないで、空き時間はぜひぜひ図書館へ行こう！



上田さんオススメの「図書館ミニツアー」のご案内（今年は春学期に開催しました）

桜美林大学図書館 図書館ミニツアー開催のお知らせ

新入生を対象に図書館のミニツアーを開催します！
図書館にはどんな本があるの？図書館の中ってどうなってるの？・・・
そんな新入生のみなさんのために図書館ミニツアーを企画しました。

このミニツアーに参加すると、20分でこんなことがわかるようになります♪

- * 図書館の概要・・・大学図書館ってどんなところ？
- * 資料の利用方法・・・貸出はどこで？
- * 各フロアの概要・・・こんなフロアがあったのか！こんな本があったの!?

図書館員が図書館の隅から隅まで案内します。これを機会に図書館を探検してみませんか？
興味のある方は友だちを誘ってぜひ参加してみてください。

日時：4月5日（月）～4月23日（金） 12：20～12：40（予定）※土曜日は行いません。

- 参加方法
- * 事前申込みは不要です。
 - * 上記の時間に図書館本館3Fのレファレンスカウンター前に集まって下さい。（案内板を設置します）
 - * 参加者1人以上から実施します。★新入生でなくても歓迎！



新規導入データベース・eBook紹介



2010年度に新規に導入したデータベースと電子ブックについて、紹介します。ぜひ、ご活用ください。

「Literature Online」 英米文学の研究・調査・資料収集にはこれを使おう！

約35万点におよぶ韻文、散文、戯曲などの文学作品に加え、文学の専門雑誌の記事全文、作家の評伝、辞書・事典などの参考資料、200誌以上の雑誌の記事全文などが収録されています。世界最大級の英米文学総合データベースです。

収録内容	内容詳細
文学作品 フルテキストコレクション	8世紀から現代までの多くの文学作品のフルテキストを収録しています。 (韻文345,000作品以上、散文2,250作品以上、戯曲6,755作品以上)
作家情報	100以上の国の約17,000人の作家について、生没年、文学史上の時期、国籍などの基本情報とともに、評伝・作品の一覧・関連文献のリンクを提供しています。
Poets on Screen	現代の作家が、自身の作品や影響を受けた作品を朗読するストーリーミングビデオを提供しています。

「東洋経済雑誌記事閲覧サービス」 東洋経済の雑誌がオンラインで読めます！

雑誌・論文情報データベースである「MAGAZINEPLUS」の検索結果から、東洋経済新報社発行の下記5誌の記事をフルテキストでご覧になれます。

『週刊東洋経済』 (1997年5月31日号～)	『Think! (シンク!)』 (2006年 Spring～)
『金融ビジネス』 (2006年 Summer～)	『一橋ビジネスレビュー』 (2006年春号～)
『オール投資』 (2006年5月1日～)	

MAGAZINEPLUSの検索結果詳細画面に表示されている「リンクリプル」および「東洋経済雑誌記事閲覧」をクリックすると「桜美林大学」と「東洋経済」のアイコンが表示されます。フルテキストを見たい場合は「東洋経済」のアイコンをクリックします。次の画面に表示される「テキスト版」or「PDF版」のどちらかを選択すると本文が表示されます。

「聞蔵Ⅱビジュアル」 (オプションコンテンツ)

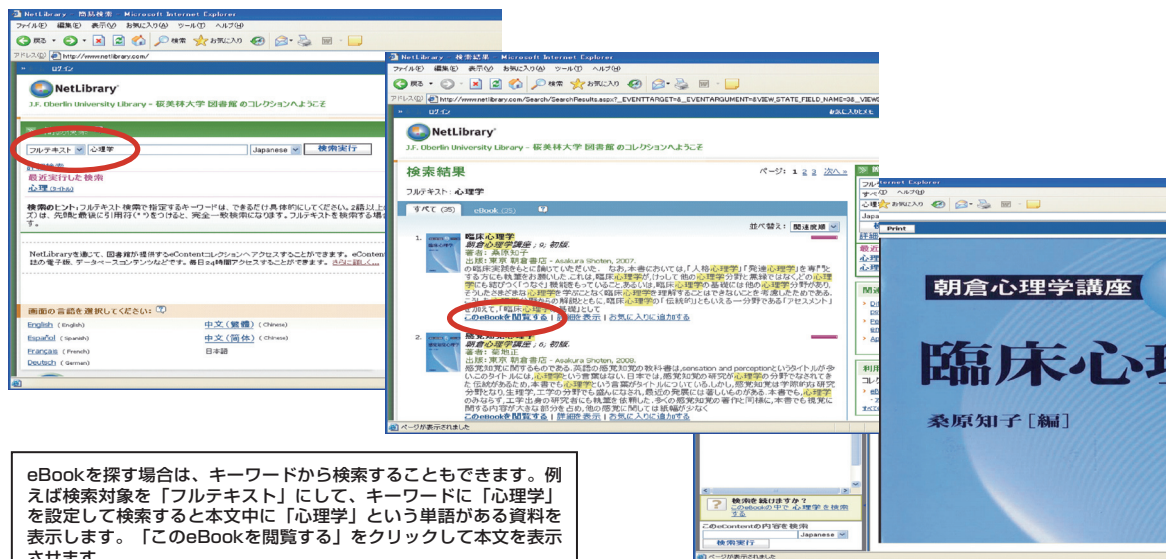
朝日新聞の創刊号から記事が読めます！また古い写真も収録しています！

朝日新聞のオンライン記事データベース「聞蔵Ⅱビジュアル」にオプションコンテンツを追加しました。これにより、朝日新聞の創刊号から最新号までの記事検索・閲覧ができるようになりました。

追加コンテンツ	内容詳細
明治・大正紙面データベース	1879年(明治12年)の創刊号から大正までの紙面イメージ約12万3000ページを収録しています。当時の紙面をそのままPDFで閲覧できます。
昭和(戦前)紙面データベース	1926年(昭和元年)～1945年(昭和20年)の約8万8000ページの紙面イメージを収録し、約85万件の記事と約47万件の新聞広告が検索可能です。
人物データベース	研究者を中心に政治・行政・司法関係者、経済人、評論家、文学芸術・スポーツ関係者などを幅広く収録しています。
歴史写真アーカイブ	満州事変の前後から敗戦までの間に、アジア各地で記者やカメラマンによって撮影された写真約1万枚をデータベース化しています。

「NetLibrary」 eBookの提供も開始しました！

NetLibraryは、eBook（電子書籍）提供サービスです。現在本学では、和書66冊（朝倉書店の『朝倉心理学講座』や『基礎数学シリーズ』など）とアクセスフリーの洋書約3,460冊が利用可能です。複数のeBookの横断検索やeBook内の全文検索も可能です。個人アカウント作成により学外アクセスが可能です。



図書館ガイダンスについて 2010年度春学期実施報告



今年度は、4月初旬のオリエンテーション期間中に、総合文化学群、健康福祉学群、大学院、留学生別科の新入生を対象に図書館のオリエンテーションを行いました。これらに加えて、今年度はRJ留学生の新入生にも実施しました。また、4月下旬から7月にかけては、リベラルアーツ（LA）学群では1年生の「LAセミナー」の授業の中で、ビジネスマネジメント（BM）学群においても、1年生の「ビジネスの基礎」の授業の中で、蔵書検索やデータベースの検索の説明と検索実習、および図書館の館内ツアーを行いました。今年度は、LA学群が67クラスで約1,000名、BM学群が27クラスで約420名と、これだけで94クラスになりました。

その他にも、「文章表現法」の授業や、LA学群の「専攻演習」でもガイダンスを行いました。これらは、図書館の各フロアをじっくり時間をかけて巡る館内ツアーから、ゼミ論、卒論のための資料探しのためのデータベース検索・情報検索に重点を置いたものなど様々でした。

また今回、ガイダンスを担当して感じたことは、メモを取ったりして、熱心に聞き入っている学生諸君が多かったことです。私たち図書館職員は、皆さんのそういった反応をみていますと、「ガイダンスをやっていて良かったな」と感じます。そのために、もっと分かりやすく説明できるように工夫したりしなければいけないな、もっと色々勉強しておかなければいけないかな、等々と考えさせられるところもありました。

私たち図書館職員は、皆さんに図書館で持っている資料やデータベース等に興味を持ってもらい、まずは図書館に足を運んで頂きたいと思っています。そして、学生生活の中で、レポートや課題、ゼミ論・卒論のための資料探しということだけでなく、就職活動や皆さん個々の趣味・教養などを満たすためにも、ぜひ図書館を積極的に利用してください。

インターネット社会といわれるような時代になっても、図書館の資料には、インターネットで調べただけでは得られない貴重な情報もたくさん含まれています。皆さんには、図書館を有効に活用して、充実した学生生活を送って頂けたらと思います。それでは、図書館職員一同、皆さんの利用をお待ちしています。（情報サービス課 村上祐司）



2010年春から新たに実施した
RJ留学生向けのオリエンテーション

図書館読書運動プロジェクト報告



今年の6月に図書館読書運動プロジェクト（通称読プロ）のミーティングが行われました。集まった学生、教職員メンバーたちにより、2010年度の読プロの活動基本方針について、最終的に読プロ原点に立ち返り「図書館読書運動プロジェクトとして読書会の呼びかけを行い、メンバー自らも読書会を開催する」ということに決まりました。読書会授業や学内の読書サークルでも活発に読書会が開催されています。また活動を知らせるためのフリーペーパー「読書会通信」も発行されました。図書館に置いてあるので、興味のある方はぜひ手にとってみてください。

7月にはメンバーが「夏をテーマにした本」を推薦し図書館で展示・貸出をしました。タイトルに「夏」「サマー」などが入った本、テーマや設定が「夏」であるものも可（ジャンル不問）という条件で、学生・教職員メンバーからコメントつきで推薦された本の一部をご紹介します。



『サマータイム』 佐藤多佳子著

夏、どしゃ降りの雨が降る人もまばらなプール。ぼくはそこで、じたばたものがくような、不思議な泳ぎをする彼に出会った。彼、広一君には、左腕がなかった。とても暑い夏の日、広一君はたった一本の右腕で自転車を漕ぐ。荷台に佳奈を乗せて、力強く、ペダルを踏んだ。

『異人たちの夏』 山田太一著

なつかしくて楽しくて哀しくて、ちょっと怖い。孤独なシナリオ・ライターが体験した不思議な夏は、生きる力を与えて消えていきました。

思わず手にとって読んでみたくなるようなコメントです。他にもシェイクスピア『夏の夜の夢/間違いの喜劇』、乙一『夏と花火と私の死体』、城山三郎『官僚たちの夏』、山川方夫『夏の葬列』など、青春小説、恋愛小説、SF、ミステリー、社会派、古典と幅広いラインアップが出揃いました。これらの本を片手に夏休みを過ごした学生たちも多かったと思います。



桜美林コメント大賞や留学生コメント大賞の準備も着々と進んでおり、呼びかけ人の学生メンバーも12月の表彰式に向けて大忙しです。このニュースが出る頃には、読書コメントが続々と集まっていることでしょう。留学生が日本語で読書コメントを書くという留学生コメント大賞も、生協留学生委員会有志によって準備されています。桜美林大学を「キャンパスのあちらこちらでみんなが本を読み議論しあっている大学にしたい!」という図書館読書運動プロジェクトはまだまだ続きます。学生たちの活躍にご期待ください！（情報サービス課長 佐々木俊介）

三到図書館 40周年 記念特集号 編集後記

改めて学園を見渡してみれば、40年の長きに亘って同じ場所、同じ建物で業務を続けている部署は、もうこの三到図書館くらいしか見当たらない。ふだんはそんなことを意識することもあまりないのだが、例えば本が増えて館内の書架が足りなくなそうとか、利用者用コンピュータを増設したいが電気の容量はだいじょうぶか、などという話題になると、途端に私たち図書館職員は「40年」という歴史に直面する。

学生や教育形態、資料形態の多様化と、それらに伴う図書館利用教育の提供、大学院四谷キャンパスや通信教育授業対応など、現在、三到図書館が直面している課題は山積している。私たち図書館職員も、未来に向け、今まで以上に視野を広げて、これからも多様な利用者サービスに取り組んでいかなければならない。

（情報サービス課長 佐々木俊介）

『三到図書館ニュース』40周年記念特集号 編集委員会

石崎栄子、佐々木俊介、高橋瑞江、三上彰、矢部知美、村上祐司、中島真由美、糸数ナンシー美香